広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第40号　2012．3〉

保育カンファレンスの外部公開は内部の保育者に何をもたらすのか

松本　信吾　　中坪　史典　　杉村伸一郎　　林　よし恵
日切　慶子　　正田るり子　　藤橋　智子
（研究協力者）中西さやか　　境　愛一郎　　刘　原婧璇

１．はじめに

保育カンファレンスとは，医師，看護師，カウンセラーなどの専門家が行う臨床事例についての意見交換や協議を保育に適用したものである（森上，1996）。保育カンファレンスについては，園の中で同僚と学び合い多様な意見を交わすことで，日々の保育を振り返り，新たな気付きを得ることができる（中坪・秋田・増田・安見・砂上・箕輪，2010），他者の意見を通して保育に内在する自身の問題を発見できる（平山，1995）などのメリットが報告されており，今日では，多くの保育所・幼稚園において実施されている。

保育カンファレンスに関する先行研究では，同僚との相互作用から保育実践を振り返り，保育者が自らの子どもへの関わり方をとらえ直したり，意識化したりする機会となること（松井，2009），同僚間で，互いに目にした子どもの姿を出し合うことにより，子どもへの理解を深めたり，変化を確かめたりしながら，保育を意味づけていく過程を協働して作り上げることが可能になること（田中・田丸・高月・高橋，2010）などが指摘されている。また，エピソードによって，保育者はリアルな子どもの姿をイメージすることができ，参加者全員が自らの日常的保育実践を表象することが容易になり，保育者の省察と問題意識の明確化にも役立つことも指摘されており（芦澤，2010），保育カンファレンスによって同僚と討議し，問題を共有することの有効性が注目されている。そのため，日々の保育の渦中にいる保育者たちが実践を振り返る機会となり，自園の保育をより良くしたり，保育者同士で実践の向上を促したりすることができる方法として関心が向けられてきた。

その一方で，従来の保育カンファレンスでは，それぞれの園が有する特有の文化や価値観に縛られることで議論が硬直化してしまう，楽しい雑談に終始してしまい，なかなか事象について深めることが難しいといった問題点も挙げられる。また，「発言の平等性」や「話の具体性」に，職位や経験年数が影響しているとした報告もある（田中・桝田・吉岡・伊集院・上坂・高橋・尾形・田中，1996）従って，園長，主任などベテラン保育者の意見が大きな影響力を持ち，最終的にはその意見に集約されることが多く，新人や若年保育者にとっては，学習の場としては機能する一方で，自身の振り返りの場とはなりにくいということが課題として指摘できるだろう。

以上を鑑みると，今までの保育カンファレンスには，実践中のエピソードについて，その園の保育者の中だけで話し合うという傾向と，それに伴う課題があったということができる。そのため，保育カンファレンスをより重層的な議論の場とするにあたっては，その園の保育者だけでなく，第三者がそこに加わることの重要性や意義についても検討する余地があるだろう。

そうした中，広島大学附属幼稚園では，『子どもの経験から振り返る保育プロセス』（秋田・芦田・鈴木・門田・野口・箕輪・淀川・小田，2010）を用いて保育カンファレンスを行うとともに，外部の保育関係者に対して公開し，積極的に参加を呼びかけることを試みた（以下，公開カンファレンスと表記する）。

私たちが，公開カンファレンスに『子どもの経験から振り返る保育プロセス』を用いた理由は，以下の３点である。第一に，「安心度」「夢中度」という数値化した基準をもとに議論することで，参加者間で互いの発言に対する理解や論点の共有が得やすいこと。第二に，エピソードに登場する幼児の「今，ここ」の理解が目指されているため，日々の様子を知らない外部参加者も意見が述べやすいこと。第三に，「安心度」「夢

Shingo Matsumoto, Fuminori Nakatsubo, Shinichiro Sugimura, Yoshie Hayashi, Keiko Higiri, Ruriko Syouda, Tomoko Fujihashi, Sayaka Nakanishi, Ai-ichiro Sakai, Liu Yuanjingxuan: What does the outside exhibition of the early childhood education and care conference bring inside kindergarten teachers?

中度」の評定の後，なぜその数字を付けたのか，その理由と根拠を他人との意見を踏まえ，振り返るプロセスが設けられていること，である。

本研究では，広島大学附属幼稚園の保育者（以下，内部の保育者と表記する）にとっての，公開カンファレンスのメリット・デメリットを明らかにするとともに，公開カンファレンスを実践しての気づきや示唆を得ることを目的とする。

２．公開カンファレンスの概略

（1）『子どもの経験から振り返る保育プロセス』を用いた公開カンファレンスの実施

上記の通り，『子どもの経験から振り返る保育プロセス』では，「安心度」「夢中度」という２つの視点を用いた保育カンファレンスの在り方が提唱されている。この２つの視点は，リューベン大学（ベルギー）のLaevers(2005)によって考案されたものである。「安心度」とは，「子どもがどれだけ『心地よく』過ごしているかという居場所感をとらえる視点」であり，「夢中度」とは，「子どもがどれだけ『活動に没頭』しているかをみる視点」である。公開カンファレンスでは，園における子どもの経験をこの２つの視点からとらえ，『子どもの経験から振り返る保育プロセス』に掲載されている評定基準（表１，表２）に照らし合わせて，１：「特に低い」から５：「特に高い」の５段階で評定し，議論を行なった。

表１　「安心度」の評定基準

評定		
1	特に低い	子どもが明らかに不快感を示している。 ・ぐずる，泣く，叫ぶ，キーキー声を出す。 ・元気がなく，悲しそうにしていたり，おびえている。パニック状態になっている。 ・怒ったり，暴れたりしている。 ・足をバタバタさせたり，床に寝転がったり，物を投げたり，他人をたたいたりしている。 ・指吸いをしたり，目をこすったりしている。 ・環境へ働きかけなかったり，人との接触を避けたり，引きこもったりしている。 ・頭を自分でたたいたり，床にたたいたりなどの自傷行為が見られる。
2	低い	子どもの態度，表情，行動から，子どもの気持ちが安定していないことを示している。しかし，評定1ほど明確な様子は見られず，不快感が絶えず示されているわけでもない。
3	中程度	子どもの態度は自然で，表情や態度に大きな変化がない。悲しそうなそぶりや喜びの表現，快適か快適でないかの様子もそれほど明確ではない。
4	高い	子どもは明らかに評定５に書かれている満足の様子を示している。しかし，持続的に絶えずその様子が見られるわけではない。
5	特に高い	観察中，子どもは楽しんでおり，実際満足している。 ・子どもは楽しそうで，機嫌がよく，笑い，笑顔で，歓喜の声を出している。 ・子どもは自主的で，表現豊かで，元気である。 ・子どもは自分自身に話しかけたり，何かをしゃべったり，鼻歌を歌いながら活動している。 ・子どもはリラックスしていて，ストレスや緊張した様子を見せない。 ・子どもは開放的で，環境に積極的に関わっている。 ・子どもは生き生きしていて，はつらつとして喜びにあふれている。 ・子どもは自信と確信にあふれた態度を見せている。

表２　「夢中度」の評定基準

評定		
1	特に低い	子どもはほとんど何の活動もしていない。 ・何かに集中しているように見えない。ボーとしていて，寝起きのような状態。 ・放心したような状態で，活気がない。 ・無目的な活動，行動が見られ，生産的な動きをしていない。 ・探究心や関心が見られない。 ・何かをしようともしないし，心も動いていないように見える。
2	低い	子どもはある程度活動しているが，たびたび中断してしまう。 ・少しは集中しているが，活動中に他の方を見たり，ぶらぶらしたり，ボーとしたりしている。 ・簡単に気が散ってしまう。 ・行動が単純な結果しか生まない。
3	中程度	子どもはいつも忙しそうにしているが，何かに集中しているようには見えない。 ・決まりきった行動が多く，活動に表面的な注意しか払っていない。 ・活動に没頭しておらず，活動が短時間で終わってしまう。 ・活動への意欲がそれほど高くなく，熱中することもなく，挑戦的でもない。 ・子どもは，その活動で得られる十分な経験を得られていない。 ・子どもは自分の能力を十分に発揮していない。 ・活動が子供たちの想像力を刺激していない。
4	高い	明らかに子どもは活動に参加している様子が見える。しかし，常に精一杯取り組んでいるとは見えない。 ・子どもは絶えず活動に取り組んでいる。 ・活動中，真剣に取り組んでいるが，時たま，注意がそれることがある。 ・子どもは挑戦的に活動に取り組んでいて，活動へのモチベーションもある程度高い。 ・子どもの能力や想像力がある程度活動に反映している。
5	特に高い	観察中，子どもは絶えず活動に取り組んでおり，完全に没頭している。 ・子どもは，活動中，中断することなく，焦点を定めて，集中している。 ・子どもは活動に対して高い意欲を持っており，活動に魅力を感じていて，辛抱強く取り組んでいる。 ・何か強い邪魔が入っても，気を散らすことがない。 ・子どもは注意深く，細部にも注意を払い，几帳面に活動している。 ・精神的な活動も，実際の経験も高いレベルである。 ・子どもは絶えず全力を尽くしている。想像力も精神的能力も最大限に働かせている。 ・子どもは活動に夢中になることを楽しんでいる。

（2）公開カンファレンスの手続き

公開カンファレンスは，2011年５月18日，６月15日，７月６日，10月５日，12月７日，2012年２月８日の計６回行なわれた。このうち，本研究の対象としたのは，第１回（５月18日）～第５回（12月７日）までのカンファレンスである。公開カンファレンスは，以下のような手続きによって行なわれた。

【対象児の選定】

対象児は，３歳児，４歳児，５歳児各１名，計３名である。対象児の選定にあたっては，４月当初に各クラスの担任保育者が中心となり，そのクラス全員の「安心度」と「夢中度」を評定した。その結果，「安心度」と「夢中度」が比較的低かった３名（各クラス１名）を対象児として選定した。

【エピソードの収集および抽出】

午前中の自由遊び時間の対象児３名の様子を，大学院生（中西・境・刈）がビデオカメラで撮影した。そのビデオ映像の中から，対象児１名につき３分程度の映像をエピソードとして抽出した。

【公開カンファレンス】

公開カンファレンスでは，まず中坪がファシリテーターとして，会の進め方や「安心度」と「夢中度」の意味についての説明を行った。その後，映像を撮影した大学院生が，エピソードを文章化したものを読み上げた後，ビデオ映像を視聴した。その後，ビデオ映像に基づいて議論が行なわれた。

議論は，以下のような流れで行なった。まず，エピソード中の子どもの「今ここ」の姿についてカンファレンス参加者全員が「安心度」と「夢中度」の評定を行なった。その後，ファシリテーターの司会のもと，指名された参加者が，自分のつけた「安心度」と「夢中度」，およびその理由を述べた。それは，１事例に対して10名程度であり，主として内部の保育者が先に，その後外部参加者が自分の評定とその理由を述べた。その後，「安心度」「夢中度」の高さ・低さの要因を，ファシリテーターの司会のもと，参加者全員で検討した。それらの議論を踏まえて，対象児の「安心度」と「夢中度」を高めるために，明日からの保育の中で何ができるのかについて議論を行なった。

なお，１回のカンファレンスの時間は対象児一人につき約40分，合計120分程度であった。

（写真１）公開カンファレンスの様子

【公開カンファレンスのメンバー】

公開カンファレンスのメンバーは表３の通りである。このうち，カンファレンスにおいて，「安心度」と「夢中度」を評定し議論を行ったのは，内部の保育者と外部参加者である。また，第５回までの外部参加者の参加人数は表４の通りである。

外部参加者の内訳は，幼稚園関係者18名，保育所関係者27名，認定こども園関係者２名，大学教員および学生５名，その他４名であった。

表３　公開カンファレンスの参加メンバー

立場	人数	備考
ファシリテーター	1名	大学教員（中坪）
事例報告者	3名	大学院生（中西・境・刈）
内部の保育者	7～9名	広島大学附属幼稚園長・副園長・教諭・養護教諭・非常勤講師
外部参加者	※表４参照	

表４　公開カンファレンスの外部参加者数

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	計
4名	9名	14名	21名	8名	56名

３．公開カンファレンスのメリット・デメリット

第５回までの公開カンファレンスを受けて，内部の保育者が，公開カンファレンスのメリットとデメリットについて，感じていることを記述した。計８名の記述のうち，担任保育者３名の記述を以下に示す。

（１）保育者Ａ（保育歴５年）

・メリット

公開することのメリットとしては，外部参加者から，対象児の普段の様子を知らないからこその，ありのままにその子自身をとらえた上での気づきを聞くことができたことである。また，対象児についてだけではなく，ある遊びをやりやすくするための，素材に対するアドバイスや，コーナー設置の仕方など，保育の進め方や環境構成などについても，他園の方からアドバイスをいただき，他園の保育の進め方や環境構成について知ることができてよかった。

また，外部参加者にとっては，すぐに取り入れられるかどうかは別にしても，『子どもの経験から振り返る保育プロセス』の方法や，安心度・夢中度という視点を知ってもらえたことはよかったと思う。

・デメリット

ビデオを見て「安心度」「夢中度」を評定し，それを分類するところまでは初めて来る外部参加者でもできると思うが，具体的なその後の保育（対象児の「安心度」と「夢中度」を高めるために，明日からの保育の中で何ができるのかについて議論）まではなかなか答えにくいのではないかと思った。また，対象児の様子や前回までの育ち（背景部分）を最初に話した方が，初めて来た外部参加者も評定がしやすいのではないかと思った。さらに，公開という形だと人数が多いこともあり，発表形式になり意見が出にくい時があるよう

に感じた。職員のみで，みんなで顔を合わせて話した時の方が，話しやすい雰囲気があるのか，色々な意見が出やすかったように感じ，明日の保育のヒントを多く得ることができるように感じた。

（2）保育者Ｂ（保育歴５年）

・メリット

外部参加者から多様な意見がもらえる。例えば，私は対象児が楽しんでいないと感じていたが，表面には現れていないけど本人は楽しんでいるのではという意見や，対象児は友だちではなくて先生を求めているのでは，などの意見をもらうことで，自分には気づかなかった新たな視点やかかわりを見出すこともできた。

また，今回私たち行ったカンファレンスの表面的な方法，『ビデオを撮って，それをもとに定められた方法に従ってフォームに書き込んでいく』というやり方を提示することはできた。

・デメリット

普段のカンファレンスに比べて，実りが少ない気がする。深い意見も時にはあるが，一瞬の映像しか観ていないということもあり，外部参加者からは差しさわりのない意見が多かった。明日の保育を探るという内容については，普段の子どもの様子を知らない参加者にとっては，一瞬の映像だけでは考えることが難しいのではないかと思った。幼稚園内でカンファレンスをした方が思っていることをそのまま言いやすい。外部参加者がいると，ビデオの部分だけしか分からないし，どこまでのことを言って，どこからは言わない方がいいのか悩む。

また，設定された時間枠があるために，もっと詳しく聞きたい，考えたいと思っても遠慮してしまう。

（3）保育者Ｃ（保育歴17年）

・メリット

園外の保育者の意見を聞くことができることが最大のメリット。園内の保育者の評定は，その子どもの背景を知っているからかだいたい似た評価になる傾向があるが，園外の保育者が入ると，人によっては「夢中度５」の評定も，別の人は「夢中度２」だったりするなど，評定の数値に幅がでた。そのことで，議論が活発化することが多くあった。また，園内のみのカンファレンスでは得られない，自分は全く気づかなかった視点（対象児は今のままで，十分楽しんでいる。今の姿は大事なのではないか，など）を与えられ，新鮮で目から鱗が落ちるような経験ができた。

また，公開カンファレンスでは，自分が対象児に関与していないときの場面が取り上げられる事が多く，新鮮な気持ちで，対象児の姿を見ることができた。そのことで，対象児に対する新たな幼児理解もできたように思う。

・デメリット

デメリットとは言えないかもしれないが，ファシリテーターがいるので，自分の感じたことや言いたいことを十分に述べることができないと感じることがあった。また，抽出するビデオの映像よっては十分に議論が深まらないなど，取り上げられる事例によってその後のカンファレンスの質が左右される傾向があった。

（4）メリットとデメリットのまとめ

上記の３名を含め，計８名の保育者が記述した文章を，内容ごとに分割し，それらをグループ化してまとめたものが表５である。

表５　カンファレンスを公開することのメリットとデメリット

メリット	内容	・新鮮な意見，多様な視点，脱文脈（４名） ・他園のやり方を知る ・自分が観ていない場面で新鮮な気づき
	方法	・「安心度，・夢中度」で皆が参加可能（２名） ・ビデオのおかげで，皆が参加可能（２名）
	運営	・外部参加者の存在で定期的にカンファレンスを継続可能
	伝播	・外部参加者が自分の園に持ち帰り活用できる可能性（３名）
デメリット	内容	・援助への深まりが薄い（３名） ・構える，素直に出しにくい（２名）
	方法	・抽出されたビデオ映像による議論の限界性（３名）
	運営	・時間的な限界。融通が利かない（４名） ・ファシリテーターの存在で，十分に思いが伝えられない

表５にあるように，内部の保育者からは公開することにより，新鮮な意見や多様な視点を得られるというメリットが多く示された。特にベテラン保育者である保育者Ｃは，『園内のみのカンファレンスでは得られない，自分は全く気づかなかった視点を与えられ，新鮮で目から鱗が落ちるような経験ができた』と，カンファレンスを公開したからこそ得られたであろうメリットを述べている。それをもたらしたものは，一つには今までの保育の文脈や，園が有する特有の文化や価値観を共有していない外部参加者の発言があったからであろう。もう一つ，内部の保育者に新たな視点や新鮮さを与えた理由として，保育者Ｃが述べているよ

うに，保育者が事例を取り上げるのでなく，大学院生が事例を取り上げることで，自分が対象児に関与していないときの対象児の様子を観ることができるという点もあると考えられる。「他者による報告」が，保育者自身が自分の保育や対象児のことを客観視する一助になることで，新鮮な視点や新たな幼児理解が得られやすかったと思われる。

その一方でデメリットとして，保育者A，Bの記述にもあるように，援助への深まりが薄いということも多く示された。若手の保育者にとっては，園内だけで行うカンファレンスの方が，自分が保育を行う上で有効な示唆を得やすいと感じていることが伺えた。これは，園内で行うカンファレンスの一機能である，若年保育者にとって学習の場としての意味合いが減少したことを示唆するものであろう。また，保育者Cが述べた，ファシリテーターの存在により自分の思いが十分に述べられないという意見は，デメリットよりもむしろ，田中他（1996）の述べる「発言の平等性」を保障する意味を与えたとも考えられる。

4.「公開カンファレンス」実践からの気づき

本節では，前節の内容を踏まえ，公開カンファレンスを実践することを通して得られた気づきや示唆について考察する。

（1）公開カンファレンスによりもたたされるもの

公開カンファレンスに対して，経験の少ない保育者は，肯定的な面を示しながらも，園内のカンファレンスと比較するとおおむね否定的であった。一方，ベテランの保育者の方が公開することの意義を感じていることが示された。これは，園内のカンファレンスにおける，両者の役割の違いによるところが大きいと思われる。

前述の中坪他（2010）が述べるように，保育カンファレンスは，園の中で同僚と学び合い多様な意見を交わすことで，日々の保育を振り返り，新たな気付きを得ることができる機会である。しかし，園内という固定化したメンバーでのカンファレンスにおいては，前述の田中他（1996）が指摘するように，職位や経験年数の影響は避けられず，どうしても「新たな気づき」を「伝える側」と「受ける側」という役割が作られやすい。その意味で，若手の保育者にとっては，園内のカンファレンスの方が効率よく焦点化した「新たな気づき」を得ることができるという感想を持ったのではないか。一方で，ベテラン保育者は，園内では「伝える側」に立つことが多いために，自らは「新たな気づき」を得ることが難しくなっていたと考えられる。同時に園内でのカンファレンスでは，自らが抽出した事例を用いることが多く，中心になって発言することが多いために，予めある程度の議論の筋書きができていることが多いのであろう。秋田（1997）は中堅にさしかかった保育者は，保育への見通しがつき，経験値も習得され，保育者として自己イメージが明確になる時期である一方で，停滞の時期でもあるとし，教師として成長を続けることの難しさを述べている。その意味でも，保育者以外が事例を収集し，ファシリテーターが進行をし，自園が有する特有の文化や価値観に縛られていない外部参加者が発言するという，普段とは異なる要素の加わったカンファレンスが営まれることで，「新たな気づき」を得ることが可能となったと思われる。

このように，公開カンファレンスは，園内の固定化した文化や価値観に風穴を開ける意味があることが示された。また，若手の保育者よりもベテランの保育者にとって有効である可能性が示唆された。

（2）公開カンファレンスが成立する要因

対象児に対する援助を探るカンファレンスに，外部の人間が参加し発言することは，通常であれば困難であろう。しかし，今回の公開カンファレンスでは，外部参加者も意見を述べ議論の俎上に載っていたことから，外部参加者にとってもカンファレンスとして十分機能していたと思われる。

それを可能にしたのが，「安心度」と「夢中度」という子どもの「今，ここ」をとらえる視点の存在であり，ビデオ映像の存在であったと考えられる。表3「カンファレンスを公開することのメリットとデメリット」におけるメリットの「方法」に示されているように内部の保育者から，外部参加者が同じ土俵で議論するためにはビデオ映像は必要であるという意見，および，対象児を「安心度」と「夢中度」という視点でとらえることで，それまでの過去の姿を知らなくても評点ができ，議論に参加できるという意見が示された。

厳密に考えると，上記の内容はカンファレンスを公開することのメリットではなく，カンファレンスの方法に対する意見である。それが内部の保育者から示されたのは，これらの要素がなければ，外部参加者と一緒にカンファレンスをすすめるとこが難しかったのではないか，という思いからであろう。つまり，内部の保育者がとらえた，公開カンファレンスが成立する要因を示していると思われる。

今後，外部参加者に直接尋ねることにより，公開カンファレンスが成立する要因をさらに検討していく必要があるだろう。

（3）公開カンファレンスのもつ課題

公開カンファレンスのデメリットとして，対象児に対する援助が，園内だけで行う場合よりも深まっていかないという意見が複数示された。このことは，これも複数からデメリットとして示された，抽出されたビデオ映像による議論の限界性という指摘とも付随する内容と言えるであろう。「新たな気づき」という意味では，外部参加者の意見は有効である。しかし，対象児に対する援助を考える際には，ビデオで見た「今，ここ」の場面における「安心度」と「夢中度」を高める視点だけでなく，これまでの幼児理解，変容の過程，援助の歴史などが無視できない。それらを踏まえた援助を紡ぎ出すのが保育者の努めでもある。その意味でも，それまでの歴史を知らない外部参加者は，脱文脈の「新たな気づき」を与える可能性に富んでいるが，一方で，限界もあることは否めないであろう。

また，デメリットとして時間的な限界を述べた意見が，内部の保育者から多数示された。園内だけで行う場合に比べ，当然参加人数が増えるのであるから，一定時間内に与えられる一人の持ち時間は少なくなるので，当然の意見であろう。しかし，この点は参加人数が多くなることのデメリットであり，公開することのデメリットとは言えない。その他，挙げられているデメリットについても，それが，「公開」することによるデメリットなのかどうかを，吟味する必要があるだろう。

5．おわりに

本研究では，公開する側である内部の保育者にとって，公開カンファレンスのメリット・デメリットについて考察した。保育者以外が事例を収集し，ファシリテーターが進行をし，自園が有する特有の文化や価値観に縛られていない外部参加者が発言するという，普段とは異なる要素が加わったカンファレンスとなることで，そこから様々なメリットやデメリットがもたらされていることが示された。公開するメリットとして，園内の普段のカンファレンスでは「新たな気づき」を得ることが難しいとされるベテラン保育者にもそれらを与える可能性が示唆された点は，本研究の成果といえるであろう。

今後の課題として，本研究では対象としなかった，公開される側，つまり外部参加者にとって，公開カンファレンスは何をもたらすのかについて検討する必要性が挙げられる。公開カンファレンスに参加して何らかの学びや手応えはあったのか。どのような点で参加しやすく，また参加しにくかったのか。自園での実践に活かされたかなどを検討していく必要があるだろう。そのことにより，公開する側にも公開される側にもメリットが認められるのであれば，公開カンファレンスの意義が明らかとなり，保育カンファレンスのあり方へ一石を投じることも期待される。

引用文献

秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊（2010）『子どもの経験から振り返る保育プロセス―明日のより良い保育のために』幼児教育映像製作委員会

秋田喜代美（1997）「教師の生涯発達―つまずきと成長２ 中堅教師への成長と停滞を越えて」児童心理，51，693－701　金子書房

芦澤清音（2010）「発達臨床の専門性は保育カンファレンスで保育者をどのように支援するか―保育園の気になる子の事例検討会の分析」『帝京大学文学部教育学科紀要』第35号25－35

平山園子（1995）「保育カンファレンスの有効性」『保育研究』16（３）．18－29

Laevers, F.（Ed.）（2005）Well-being and Involvement inCare Settings. A Process-oriented Self-evaluation Instrument. Kind & Gezin and RESEARCH CENTRE FOR EXPERIENTEL EDUCATION

松井剛太（2009）「保育カンファレンスにおける保育実践の再構成―チェンジエージェントの役割と保育カンファレンスの構造」『保育学研究』第47巻第１号　12－21

森上史郎（1996）『カンファレンスによって保育をひらく』発達68．ミネルヴァ書房1－4

中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・安見克夫・砂上史子・箕輪潤子（2010）「保育カンファレンスにおける保育者の語りの特徴―保育者の感情の認識と表出を中心に―」」『乳幼児教育学研究』，第19号1－10

田中浩司・田丸尚美・高月教恵・高橋実（2010）「幼稚園における特別支援教育に関する研究―保育カンファレンスを中心とした支援事例の検討」『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報７，29－35

田中三保子・桝田 正子・吉岡晶子・伊集院理子・上坂元絵里・高橋陽子・尾形節子・田中都慈子（1996）「保育カンファレンスの検討―第一部現場の立場から考える」『保育学研究』第34巻第１号29－34